

「室町幕府の教訓その3 ～応仁の乱と使い捨ての権威」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 「箍(たが)の外れた桶」と化した室町幕府

前々回から展開している「室町幕府の教訓」ですが、最初は鎌倉幕府の滅亡から建武の新政の失敗、そして初代将軍の足利尊氏(あしかがたかうじ)がもたらした「負の遺産」とその後の混乱について話しました。

また前回は、幕府の命運をかけて果敢に改革に取り組んだ3代将軍の足利義満(あしかがよしみつ)とその子である6代将軍の足利義教(あしかがよしのり)が、それぞれ自らが「天皇を超える存在」となろうとしたり、あるいは「神に選ばれた将軍」として様々な恐怖政治を行ったりしたことで、最終的には失敗に終わってしまったことを中心に紹介しました。

そして最終回となる今回は、もはや何の権力も持てなくなった「使い捨ての将軍」と化した室町時代後期並びに戦国時代の室町幕府の実態と、そこから学ぶべき教訓について探っていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

「万人恐怖」の独裁者であった、6代将軍足利義教が暗殺されたことで、それまで義教の存在を目の上のたんこぶのように苦々しく思っていた守護大名たちは、胸をなでおろして安堵(あんど)しました。

しかしながら、たとえ強引な手法であったとしても、世の中をそれなりにまとめていた将軍がいなくなったことで、守護大名はおろかその下の守護代も含めて、まるで箍(たが)が外れた桶(おけ)のように各自がバラバラに行動を始めてしまい、收拾がつかなくなってしまいました。

そんな幕府の試練は、義教暗殺の直後に早速訪れました。嘉吉(かきつ)の乱で義教を殺害した赤松満祐(あかまつみつすけ)を討伐するために幕府軍が遠征した隙(すき)をついて、多数の農民が京都を占拠して、将軍の「代始めの徳政」を要求したのです。これは当時の年号から嘉吉の徳政一揆と呼ばれています。

幕府の管領(かんれい)であった細川持之(ほそかわもちゆき)は高利貸しの土倉(どそう)から賄賂を受け取っていたため、一揆勢の要求を無視して鎮圧するつもりでした。しかし、彼の意見は他の守護大名に聞き入れられず、結局は一揆勢との話し合いに応じざるを得なくなったのです。

「箍が外れた桶」状態の室町幕府には、もはや強引な政策は不可能だったのです。しかも、一揆

勢との交渉によって幕府は更なる難題を抱え込むことになってしまうのです。

管領の細川持之は、一揆勢との話し合いによって「農民限定の徳政令」を出すことで彼らを納得させようとしたのですが、何と一揆勢がこの条件を拒否して、徳政令の範囲を公家や武家にも広げるように要求しました。一揆勢の主力であった農民からすれば、公家や武家といった、いわゆる支配者層は憎むべき敵であるはずなのに、なぜこんなことを要求したのでしょうか。

確かに一揆勢の主体は農民でしたが、実は彼らは地侍(じごむらい、守護大名などと主従関係を結んで武士の身分を得た者のこと)の指導の下に動いていました。地侍たちは、支配者層にも徳政令の範囲を広げて彼らに「恩を売る」かたちにしておけば、徳政令発布後に処罰されることはないであろうと計算していたと考えられています。

一揆勢の要求に幕府は困惑しましたが、ただでさえ兵力が不足しているうえに、有力守護大名たちの考えがバラバラではどうすることもできません。結局幕府は「山城一国に限定した完全な徳政令」を発布せざるを得ませんでした。この結果に今度は大寺社、特に比叡山延暦寺(ひえいざんえんりやくじ)が激怒しました。

なぜなら、徳政令には、大寺社が寄進という名の下に人々から財産を取り上げていたのを返還するように書いていたからです。延暦寺は神輿(しんよ)を担(かつ)いで幕府に強訴(ごうそ)し、徳政令の対象から寺社を無理やり外すことに成功しました。

徳政令の発布によって、幕府が金融業者などからの信頼を失うのみならず、かつて義教が苦勞して抑え付けていた圧力団体としての宗教勢力の復活をも招いてしまったのです。

2. 「応仁の乱」の思惑と現実

義教の死後に幕府の権威が著しく低下した理由の一つに、「将軍の後継者不足」がありました。義教は天台座主(てんだいざす)から還俗(げんぞく、一度出家した者がもとの俗人に戻る)として将軍になったため、暗殺されたときに二人いた男子がまだ幼かったのです。

義教の後を継いだ7代将軍の足利義勝(あしかがよしかつ)は就任時わずか9歳でしたから、自ら政治ができるはずもなく、しかも翌年に急死してしまい、その後は弟の足利義政(あしかがよしまさ)が8歳で8代将軍となりました。

就任した当初の義政は、祖父の足利義満や父の義教にならって将軍権力の復活を図り、永享(えいきょう)の乱の後に鎌倉公方(かまくらくぼう)となった足利成氏(あしかがしげうじ)と関東管領の上杉氏(うえすぎし)との内紛にも積極的に関わりました。なお、1454年に始まった成氏と上杉氏との争いを、当時の年号から享徳(きょうとく)の乱といひます。

しかし、義政の妻である日野富子(ひのとみこ)や妻の実家の日野氏、あるいは有力な守護大名らが次々と政治に介入したことで、いつしか義政は政治への関心を失って贅沢(ぜいたく)な暮らしを始めたた

め、将軍としての人望を失ってしまいました。

政治への興味をなくした義政は、将軍の地位を誰かに譲って気ままに余生を過ごしたいと思いましたが、妻の富子との間には将軍後継となるべき成長した男子がいませんでした。

一日も早く隠居がしたかった義政は、弟の足利義視(あしかがよしみ)を養子として後継者に迎えたが、その直後に日野富子との間に男子(後の足利義尚=あしかがよしひさ)が生まれてしまいました。

義視からすれば、一度約束された将軍後継の地位を反故(ほご)にされてはたまったものではありませんし、義尚(よしひさ)の母の富子からすれば、自分がお腹を痛めて産んだ我が子が将軍後継になれないことほど愚かな話はありません。しかし、初代将軍である足利尊氏のように優柔不断な義政には、どちらを後継にするかを定めることが出来ませんでした。

義政がいつまで経っても後継を決めないことに業(ごう)を煮やした義視と富子は、義視が管領の細川勝元(ほそかわかつもと)に、富子が侍所(さむらいどころ)の長官である四職(ししき)筆頭の山名宗全(やまなそうぜん、出家前の名は山名持豊=やまなもちとよ)にそれぞれ接近すると、細川・山名の両氏がこれを好機として、幕府の政治の実権を握ろうとお互いに争い始めました。

この他にも守護大名の畠山氏(はたけやまし)や斯波氏(しばし)の家督(かどく)争いがからんだことで、1467年について京都で大きな戦いが起きてしまいました。戦国時代の幕開けともいわれる応仁(おうにん)の乱の始まりです。

応仁の乱が起きた後、有力な守護大名が細川氏あるいは山名氏に所属したり、あるいは分裂して両軍それぞれについたりしたので、戦いの規模はますます大きくなりました。なお、両者の位置関係から細川氏側が東軍、山名氏側が西軍と呼ばれており、また京都の西陣(にしじん)という地名は、山名氏が京都の堀川(ほりかわ)より西に陣を置いたことが由来となっています。

緒戦の戦いは山名氏に優位に展開しましたが、細川氏が巻き返して将軍義政を保護したことで、東軍の優勢となりました。しかし、今度は山名氏が守護大名の大内政弘(おおうちまさひろ)に声をかけて京都へと攻めのぼらせるなど、両軍は一進一退の戦いを続けました。

そんな折、応仁の乱のきっかけをつくった当事者たちに異変が起きました。将軍義政の弟である義視は東軍の細川氏についていましたが、細川氏が義政を迎え入れた後に、義視の政敵である伊勢貞親(いせさだちか)が再び重用されたことに反発して出奔(しゅっぽん)しました。

翌 1468 年に一旦は京都へ戻ったものの再び出奔した義視は、こともあろうにライバルの義尚を支持していた西軍の山名氏へと身を投じました。これは、将軍を奪われて大義名分を失っていた山名宗全が、巻き返しの手段として義視を迎えたためと考えられており、事実、この後山名氏は義視を「将軍格」として様々な人事を発令しています。

義視が西軍に属したことで、応仁の乱の戦いの構図は、当初の「足利義政—足利義視—細川勝元 vs.

日野富子—足利義尚—山名宗全」から「細川勝元—足利義政—日野富子—足利義尚 vs.山名宗全—足利義視」という形式となり、敵と味方とが完全に「ねじれ現象」となっていました。

これでは何のために戦っているのか分かりません。戦いの当事者たちにもいつしか厭戦(えんせん、戦争をするのをいやに思うこと)の気分が盛り上がってきましたが、応仁の乱のきっかけのひとつであった守護大名の家督争いに決着がつかなかったこともあり、戦いはいつしか京都から全国に広がって、延々と果てしなく続けられました。

そんな中で、1471年に西軍の朝倉孝景(あさくらたかかげ)が東軍に寝返ると、追いつめられた西軍は後南朝(ごなんちょう)の小倉宮(おぐらのみや)の子孫と称する人物を「西陣の南帝(なんてい)」として立てましたが、義教の時代に行われた断絶工作が進んでいたうえに、後南朝が三種の神器を持っていなかったことから、いつしか歴史上から姿を消してしまいました。

その後、1473年に山名宗全と細川勝元が相次いで亡くなり、同年に義政が義尚に将軍職を譲った後もなお戦いの決着がつかず、開始から約10年後の1477年になってようやく終戦を迎えましたが、長きにわたった戦いで、京都の街は内裏(だいり、天皇の居所を中心とする御殿のこと)をはじめとして一面焼け野原となってしまいました。

なお、隠居した義政は、後に銀閣寺または慈照寺(じしょうじ)と呼ばれた東山殿(ひがしやまどの)の建設を1482年に始めましたが、その完成を待つことなく1490年に亡くなっています。

応仁の乱が終わったことで、守護大名はそれぞれの領国に戻りましたが、一度火がついた争いは全国に拡大し、各地にあった荘園も、戦いの混乱の中でそのほとんどが守護大名や地方の豪族である国人(こくじん)の支配下に入ってしまった。

また、応仁の乱の頃から、大名の兵力の中心となった足輕(あしがる)の存在が目立ち始めました。足輕は主に金銭面のみで大名とつながっていることが多かったために忠誠心が薄く、このため各地で暴徒化して略奪を繰り返しました。

さらには守護大名が京都で戦っている隙をつかたちで、各大名の領国では守護代や国人たちが力を伸ばし、大名から領国の支配権を奪っていきました。こうして身分の下の者が上の者の勢力をしのぐ下剋上(げこくじょう)が本格的に始まり、世は戦国時代を迎えることになりました。

なお、戦国時代においても室町幕府そのものは健在でしたが、幕府が持っていた権力が本拠地の山城を除いてほとんどなくなった一方で、征夷大將軍としての形ばかりの「権威」が皮肉にも強調されることになってしまうのです。

3. 権威の「使い捨て」に振り回された足利将軍

1473年、義政が隠居して子の義尚が9代将軍となりましたが、これは義尚の母の日野富子にとっても喜ばしいことでした。彼女は「将軍の妻」という地位を利用して高利貸しなどを行い、せっせ

と蓄財に励んでいましたが、今度は「将軍の母」として自己の権力を握り続けることができたからです。

しかし、義尚は1489年に25歳の若さで子のないまま死亡してしまい、義視の子の足利義材(あしかがよしき)が後継者として1490年に10代将軍となりました。

義材は義視の子であり、また義視は富子と激しく対立して応仁の乱が起こったのですから、義材の将軍就任によって富子は当然のように権力を失ったと誰しもが思いますよね。ところが実際にはそうはなりませんでした。

なぜなら、義材の母(=義視の妻)が富子の実の妹だったからです。応仁の乱のはるか以前にかけていた「保険」によって富子の権力は温存されるとともに、夫と子を失ったことで、富子は蓄財と権力の保持にますます力を入れるようになりました。

義材が将軍に就任した頃の管領は、応仁の乱での東軍の総大将だった細川勝元の子である細川政元(ほそかわまさもと)でした。勝元はかつて義材の父の義視と連合して応仁の乱を起こしたものの、その後仲違いしたこともあって、義材と政元との関係は必ずしも良くはありませんでした。

それに加えて、義材は自分を将軍にしてくれた「恩人」でもある日野富子と次第に距離を置くようになっていたため、義材に対する富子の不満も高まっていました。

そんな折の1493年、義材は守護大名の畠山氏を討伐するために河内へ遠征すると、その隙をついて京都で政元と富子がクーデターを起こし、義政の異母兄で初代堀越公方(ほりごえくぼう)の足利政知(あしかがまさとも)の子である足利義澄(あしかがよしずみ)を、新たに11代将軍に立てました。

無理やり将軍職を追われた義材は、失意のうちに越中(えっちゅう、現在の富山県)へ逃れ、また1496年に富子が亡くなったため、以後の幕府の政治の実権は政元が握ることになりました。これを当時の年号から明応(めいおう)の政変といいます。

明応の政変は、室町幕府の将軍が、時の権力者たる臣下の思惑によって簡単に交代させられてしまうという事実を世に示したことを意味していました。足利将軍の地位が単なる「権威」に過ぎず、臣下が将軍を必要としなければ、それこそ「使い捨て」のように処分されてしまうという冷徹な現実がはっきりしたことから、この時期こそが戦国時代の始まりにふさわしいという説もあります。

将軍の首を簡単にすげ替えるという実力を示した細川政元の権力は絶大なものとなり、彼はやがて「半将軍」とまで称されるまでになりましたが、そんな政元にも大きな落とし穴がありました。彼は生涯独身を貫いたために養子を複数迎えたのですが、彼らの間で権力争いが生じてしまったのです。

1507年、政元は不意を突かれて暗殺されました。これを当時の年号から永正(えいしょう)の錯乱(さくらん)といいます。政元が殺されたことで、細川氏の間で激しい対立が繰り返され、やがて細川氏その

ものが没落していくこととなりますが、没落した人物はもう一人いました。それは将軍の義澄です。

義澄は政元と対立しつつも主従関係を維持し続けていたのですが、政元暗殺後に守護大名の大内義興(おおうちよしおき)が新たな将軍後継者を擁立(ようりつ)して上洛すると近江に逃れ、翌 1508 年には将軍職を辞めさせられました。

大内の推挙で将軍に就任したのは足利義尹(あしかがよしただ)でしたが、実は彼こそが 1493 年に将軍を廃位された義材その人だったのです。

歴史上稀(まれ)に見る「将軍返り咲き」を果たした義尹は、その後 1513 年に「義植(よしたね)」と改名しましたが、1518 年に大内が領地に帰国して後ろ盾を失うと、政元の養子であった細川高国(ほそかわたかくに)によって 1521 年に将軍の地位を再び追われ、その後寂しく生涯を閉じました。

細川高国が 12 代将軍として擁立したのは、11 代将軍義澄の子の足利義晴(あしかがよしはる)でした。高国はかつて義澄と勢力争いで対立した経験があったのですが、自らの権力を確立するために義澄の子と手を組んだこととなります。ここまで来るともう「何でもあり」の世界ですね。

そんな経緯で将軍になった義晴ですが、約 25 年ものあいだ地位を維持し続けたものの、最後には細川氏の内紛をきっかけに、将軍職を子の足利義輝(あしかがよしてる)に譲りました。

その後、細川氏が内紛を繰り返す間に実力をつけた家臣の三好長慶(みよしながよし)によって、13 代将軍の義輝は傀儡(かいらい、自分の意志や主義を表さず他人の言いなりに動いて利用される者のこと)となりましたが、義輝は諸大名の抗争の調停を行うなど少しずつ政治的手腕を発揮し、幕府権力の復活に努めました。

しかし、こうした義輝の動きを警戒した三好氏の家臣の松永久秀(まつながひさひで)らが 1565 年に謀反(むげはん)を起こすと、義輝は奮戦(ふんせん)むなしく無念の最期を遂げました。これを当時の年号から永禄(えいろく)の変(へん)といいます。

義輝の暗殺後、松永久秀らによって 11 代将軍義澄の孫にあたる足利義栄(あしかがよしひで)が 14 代将軍として 1568 年 2 月に擁立(ようりつ)されましたが、間もなく久秀らの権力争いに巻き込まれ、将軍として京都にも入れぬ有様でした。

その間に、義輝の弟の足利義昭(あしかがよしあき)が織田信長(おだのぶなが)によって上洛(じやうらく)を果たすと、久秀が信長に降伏(けうぷく)して、同 1568 年 10 月に義昭が新たに 15 代将軍となりました。なお、将軍を追われた義栄は失意(しやうい)のうちに間もなく亡くなっています。

義昭は自分を将軍にしてくれた信長に深く感謝(かんしゃ)し、管領(くわんりやう)もしくは副将軍(ふしやうぐん)になるよう勧めましたが、信長はいずれも辞退(ていひ)して、代わりに堺(さかい)を含む和泉(わいせん)の支配(しはい)を認めさせました。地位(ちゐ)や名誉(めいよ)を欲(ほ)しがらない信長の意外(いがい)な行動(こうどう)を周囲(しゅうゐ)は不思議(ふしぎ)に感じましたが、いわゆる「名(な)よりも実(じ)を取(と)った」信長の行為(ゐゐ)の裏(うら)には、彼(か)によるしたたかな計算(けいさん)があったのです。

管領や副将軍を引き受けるということは、信長が義昭の家来になるということを意味しますが、信長の最終的な目標は自身による天下統一であり、いずれは義昭を見限るつもりでした。しかし、その際にもし彼が管領や副将軍であったとすれば、主人に対する裏切りという重罪を犯してしまうことになります。

いくら戦国の世とはいえ、主君に対する謀反というのはダメージが大きく、後の天下取りにも影響を及ぼすのは避けられません。だからこそ、信長は義昭の誘いを断り、その代わりに最大の貿易港の一つであった堺を抑えるために、和泉の支配を義昭に認めさせたのでした。

さて、義昭が将軍になったばかりの頃の二人の関係は良好でしたが、信長は次第に義昭を圧迫するようになっていきました。やがて信長の本意を理解した義昭は激怒し、信長を倒すべく様々な作戦を練り始めました。

後の世に「信長包囲網」と名付けられた義昭の行動によって、一時は信長を追いつめたものの、頼りにしていた武田信玄(たけだしんげん)の急死もあって、結局は失敗に終わりました。ところが、信玄の死を知らなかった義昭は、もはや起こり得ない信玄の上洛を信じて、居住していた将軍御所で挙兵したものの、信長に攻められて降伏せざるを得ませんでした。

諦め切れない義昭は、この後もう一度挙兵しますが敗れ、1573年7月に義昭が信長によって京都を追われたことで、235年続いた室町幕府は事実上滅亡しました。時代は信長による新しい秩序に向けて着実に進んでおり、足利将軍はもはや必要とされなくなっていたのです。

4. 「室町幕府の教訓」とそれを活かした男

室町幕府には合計で15人(返り咲きを含めれば16人)の将軍が存在しましたが、そのほとんどが無理やり将軍を辞めさせられたり、あるいは無念の最期を遂げたりしていますし、また次の将軍を自分の意志で指名した人物も、数えるほどしか存在していないのが実情でした。

本来ならば、その類稀(たぐいまれ)なる武力で周囲を畏怖(いふ)させ君臨する幕府と将軍であるはずなのに、なぜこのような無惨な結果に終わってしまったのでしょうか。その理由として真っ先に考えられるのは、やはり創設者の足利尊氏による「優柔不断」であると断言できます。

尊氏が幕府を開いたのは京都でしたが、本来ならば武家の本拠地である鎌倉で政治を行うことを本人も希望していたはずですが、しかし、彼の優柔不断が結果として南朝を存続させてしまったため、万が一に備えて軍事力を確保するために、京都を離れることができなくなりました。

南朝の存在はその後も室町幕府を悩ませるとともに、その対策として、3代将軍の足利義満や6代将軍の足利義教が強引な政治を行ったため、二人とも無念の死を遂げることになってしまったのです。

尊氏の責任は「優柔不断」だけではなく、彼の「優しさ」や「気前の良さ」が幕府創設に力を貸し

た武将に広大な領土を与えることで守護大名と化し、将軍の言うことを聞かなくなっただけでなく、ついには幕府を自らの手で動かすようになりました。

しかも、権力を失った幕府に曲がりなりにも「権威」が残っていたため、将軍は時の権力者の「傀儡」として利用されるだけ利用され、逆らったり不要となったりすれば、たちまち「使い捨て」として処分されるという悲哀を味わうようになってしまったのです。

初期の対応を誤れば、それこそ何百年も失敗を重ねることになる。室町幕府の存在は、後世の人間にとつともなく大きな「教訓」を示してくれたことになりましたが、歴史の大きな流れは、その教訓を徹底して活用することで、260年以上もの長いあいだ政権を担当し続けた「ある組織」をこの世に送り出しました。

その組織とはもちろん、徳川家康(とくがわいえやす)が創設した江戸幕府のことです。

織田信長や豊臣秀吉(とよみひでよし)とほぼ同時代を生き抜くとともに、室町幕府の最期や信長あるいは秀吉の末路を実際に目にした家康は、従来の武家政権のやり方である「征夷大將軍となって幕府を開く」手法を選択するとともに、室町幕府の「失敗」から二つのことを学びました。それは「ライバルを容赦なく滅ぼすこと」と「大名の権力と財力との分散」です。

1600年に関ヶ原の戦いで豊臣家家臣の石田三成(いしだみつなり)を破った家康は、やがて戦いから10年以上が経過して、豊臣家恩顧(おんこ)の大名が次々と死亡すると、豊臣家によって再建された京都の方広寺(ほうこうじ)の梵鐘(ぼんしょう、いわゆる鐘のこと)に刻まれた「君臣豊楽(くんしんほうらく)」「国家安康(こっかあんこう)」という文字が「豊臣家の繁栄を願う一方で、家康の名を二つに割って呪いをかけている」と非難しました。

この事件がきっかけで1614年にいわゆる「大坂の役(えき)」が始まり、翌1615年に大坂城が落城して豊臣秀頼(とよみひでより)と母親の淀殿(よどどの)が自害しましたが、家康はさらに秀頼の子で8歳になる男子を探し出し、彼を捕らえると問答無用で首をはね、豊臣家を完全に滅亡させました。

結果だけ見れば、言いがかりをつけただけでなく、幼い子であっても処刑するといった容赦ない家康の手法に非難が集中しそうですが、かつて尊氏が南朝に情けをかけたがゆえに吉野に逃げられ、その結果として南北朝の動乱が半世紀以上も続いたという過去の歴史を振り返れば、徳川家による安定した政権を維持するためには、むしろ当然の選択だったといえるのです。

また家康は、関ヶ原の戦いの後に豊臣家側に所属した大名の領地を没収したり、あるいは豊臣家の領地を大幅に削減したりした際に、自分に味方した大名を中心に気前良く領地を分け与えましたが、結果として広大な領地を所有することになった大名には、幕府による政治に参加させませんでした。

江戸時代の大名は徳川家の縁戚(えんせき)に当たる親藩(しんぱん)と、関ヶ原以前から徳川家の家臣であった譜代(ふだい)、そして関ヶ原以後に徳川家に臣従した外様(とざま)とに大きく分かれており、これらのうち江戸幕府の政治の中心となって活躍した大名の多くは譜代でしたが、彼らの領地はその

ほとんどが10万石前後に留まっていました。

つまり、政治に参加して権力を与えられた者には財力を与えず、逆に政治に参加できずに権力を与えられなかった者に対しては、その代わりに財力として広大な領地を与えたのです。室町幕府の失敗の教訓を生かした「大名の権力と財力との分散」によって、家康は大名の統治に成功したのでした。

家康はこの他にも幕府安泰のために様々な対策を行ったことで、徳川幕府260年の基礎を完全に築き上げました。失敗だらけだった「室町幕府の教訓」が、後世の人間が「歴史に学ぶ」ことによって、見事に活かされる結果となったのです。

これまで繰り返し述べてきたように、歴史には大きな流れがあるとともに、成功や失敗を含めた様々な「教訓」が存在します。そして、その教訓を活かしたり、あるいは無視したりすることによって、新たに成功または失敗の歴史が加わるのです。

現在の我が国は未だに混迷を深めていますが、こうした現状を打破するためには何が求められているのでしょうか。

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とよく言われますが、過去の歴史を見つめ直して失敗も成功も両方理解することによって、二度と同じ失敗を繰り返さないことや、あるいは過去の成功例に自分がなぞらえることはいくらでも可能なはずです。

室町幕府は、ある意味自己を犠牲にしてまで私たちに貴重な「教訓」を残しましたが、私たちは今こそ歴史に学んで、我が国の輝かしい未来を自分たちの手で取り戻すことができるように、各自が努力を重ねるべきではないでしょうか。（完）

主要参考文献：「逆説の日本史 8 中世混沌編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379419>

「逆説の日本史 10 戦国覇王編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379660>

「逆説の日本史 12 近世暁光編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>

「闇の歴史、後南朝」（著者：森茂暁 出版：角川新書）

YouTube 再生リスト「室町幕府の教訓その3」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML7eNk3tTivEN-T9HIjZGiKZ>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>